「ジャガイモ、どうぞ！」

― 中学部　技術分野　野菜づくりの取組み ―

大阪精神医療センター分教室

1　はじめに

本分教室に在籍している生徒は、発達障がい、摂食障がい、適応障がい、希死念慮、ゲーム依存などの理由で入院している。分教室には、個々の状態に合わせて主治医の許可のもと登校しており、転入当初は学習に対する抵抗が強い生徒が多く、対人関係の不安感も高いため、登校への拒否感は強い。また、地域校では不登校や引きこもりだった生徒も多い。「学校」や「先生」に対する恐怖とも言えるネガティブな感情を抱く生徒や、生活経験や社会経験の乏しい生徒が在籍している。

そのため、生徒と担任の面談を毎週１回行い、教員との信頼関係を築きながら安心感を得ることで、段階的に登校する時間数を増やしている。また、各教科の中でも担当教員が生徒とのコミュニケーションを図り、個別に学習方法や配慮点についてアセスメントを行い最適な学習環境や学習方法の獲得をめざす。その結果、学習への意欲を取り戻し、分教室への登校が安定してくる。

本分教室では、国語、数学、理科、社会、英語の５教科については学年別に授業を実施している。音楽、保健体育、美術、技術・家庭科の４教科は中学部全学年で実施している。この４教科については、毎時間 15 名程の生徒での活動となる。４教科の授業の目的は各教科の単元を理解するだけでなく、集団の中でのルールを守ることや、チームで動く経験を増やすこと、コミュニケーションスキルの向上などが挙げられる。本分教室の技術の授業では、主に物を作ることや作物の育成を行っている。それらの工程や過程を理解し、主体的に工夫し、対話的に状況を判断し完成度を上げていくことで、技術分野での深い学びや気づきになるような授業づくりをめざした。本稿では、野菜づくりの取組みを紹介する。

2　プランター野菜づくり

(1)みんなで「プランター栽培」

本分教室には、作物を地植えできる場所がないため、プランター栽培を行っている。ここ数年、ゴーヤ、糸瓜、きゅうり、ミニトマト、なす、さやえんどう、ピーマンなどを栽培してきた。そして、夏はジャガイモ、秋には大根を栽培している。大型のプランターを購入し、作物育成に必要な土づくりや育成方法の学習と実習を行っている。

実習では、育成に適した土づくりや水分量や日光量を考えた管理を、生徒が相談しながら行っている。作物育成の実習での課題は、虫がいることや土を触ることに苦手意識を持つ生徒が多いことだ。

苦手意識は、そもそも土を触るなどの経験が不足していることや、発達特性による感触の苦手さなどが考えられた。そのため、その思いは聞きつつ、作業の工程の中で自分ができることを考えてもらい、参加を促している。すると、作業の準備物の運搬や後片付けなどを積極的に行うようになった。また、土づくりに取り組んでいる生徒を見て、恐る恐る土づくりに挑戦する生徒もいた。生徒同士の励まし合いや、虫に驚いたり、作物の種に愛着を持ったことで声をかけるなどして笑いが起きたり、温かいコミュニケーションの中で作業が進むこともあった。

分教室の前のグランドにプランターを置いている。プランターの置き場所については、

水道栓からの水やり用のホースの長さや、日当たりの良さなどを生徒が考え配置を決めている。そのため、かなりの重量のプランターを移動する必要が出てくる。すると、生徒が手分けして、声を掛け合い、指示を出し確認をしながら、プランターを移動させることができるようになった。日差しがきつい日には、生徒の額には汗が目に入りそうになりながら、息を弾ませ、作業にあたっている。参加した生徒が手にした軍手は真っ黒になり、「よく働いたー！」との声が上がり、ドッと笑いが起きた。

(2)「みんな」の作物

完成したプランターには、植えた作物がわかるように、生徒が手作りしたポップを飾るようにしている。ポップ作りは、絵を描くことが得意な生徒の出番となる。また、作物に愛着を持つ生徒もいて、名前を考えたり自分が作業したプランターだとわかるように工夫したりしていた。芽が出て、ぐんぐん成長する様子に喜ぶ姿を見せるかと思われたが、意外と真剣な眼差しで見ている生徒が多く、その成長を静かに見守る姿は印象的だった。

生徒の入退院によって、植えた時にいた生徒が、作物を収穫する時には退院していることも多い。一方、作物がある程度生育してから授業に参加する生徒もおり、プランターへの水やりや収穫を主に行うこともあった。そのため、プランター栽培は、在籍した中学生全員が関わって育てた「みんな」の作物と言える。

(3)ジャガイモを「どうぞ！」

収穫を迎えた作物を授業の中で順次収穫した。できれば収穫した作物を使って調理実習を実施できればよかったのだが、今年度は、中学生のテストの時期や行事との兼ね合いで実施することができなかった。そこで、せっかく時間をかけて育てた作物を口にすることなく終わるのは避けたかった。病棟スタッフに相談すると、病棟での調理プログラムでジャガイモを使用していただけることになった。病棟での調理プログラムは、不定期に実施されていたが、料理に使う食材の予算も限られていたため困っていたようで、ぜひ使いたいとの申し出だった。そこで、病棟スタッフに分教室まで来ていただき、中学生から直接手渡した。病棟スタッフの笑顔と中学生の照れた顔の間にある、ひもが切れそうなほど大きなビニール袋に入った新鮮で無農薬のジャガイモの存在は、一際大きく見えた。

３　最後に

技術の授業で野菜の栽培に取り組むことで、作物の育成に興味関心を持ってもらい豊かな心を育み生涯にわたる趣味や活動につながればと願っている。生徒の中にはより大きな関心を持ち、農業分野の進路選択につながることも期待できる。

授業での実習中、生徒が見せる表情や、何気ない会話の中に、自然から癒しをもらっているのではないかと感じてしまうことがある。大自然とは言えない、とても小さな自然であっても、自然に触れる機会は、生徒の病気や症状を軽減する力になっているのかもしれない。

今後は、分教室の理科や自立活動、家庭科などとの教科横断的な取組みを検討していきたい。また、刀根山支援学校の他の分教室と連携した活動など、可能性を探っていきたい。

真っ黒になった軍手は洗濯され、分教室の晴れた日の外デッキに干されているのは、分教室での見慣れた日常である。